名古屋芸大グループ通信

58
May
2022

NAGOYA UNIVERSITY OF THE ARTS DEGREE SHOW 2021 archive

【特集】
第49回名古屋芸術大学卒業・修了制作展
アーカイブ

名古屋芸術大学グループ
NAGOYA UNIVERSITY OF THE ARTS
https://www.nua.ac.jp/

■名古屋芸術大学／大学院：音楽研究科　美術研究科　デザイン研究科　人間発達学研究科
学部学科：芸術学部芸術学科　音楽領域　舞台芸術領域　デザイン領域　美術領域　芸術教養領域
教育学部子ども学科
■名古屋芸術大学附属クリエ幼稚園
■滝子幼稚園　■たきこ幼児園　■愛知保育園
■幼保連携型認定こども園　森のくまっこ
■名古屋音楽学校

【特集】
第49回 名古屋芸術大学 卒業・修了制作展
アーカイブ

NAGOYA UNIVERSITY OF THE ARTS DEGREE SHOW 2021 archive

2022年2月18日（金）～2月27日（日）の間、本学西キャンパスで名古屋芸術大学卒業・修了制作展を開催しました。

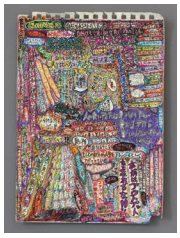
新型コロナウイルス感染症拡大による非常事態宣言下、さまざまな防疫対策や安全に作品を鑑賞していただくための工夫を施した結果、多くのご来場、アクセスをいただきました。

本特集では、特に優秀だった作品をピックアップ、卒展運営のキーパーソンのコメントと共に、名古屋芸術大学卒業・修了制作展を振り返ります。

全作品の閲覧は
こちらからどうぞ

「Mind-set drawings for 17days」

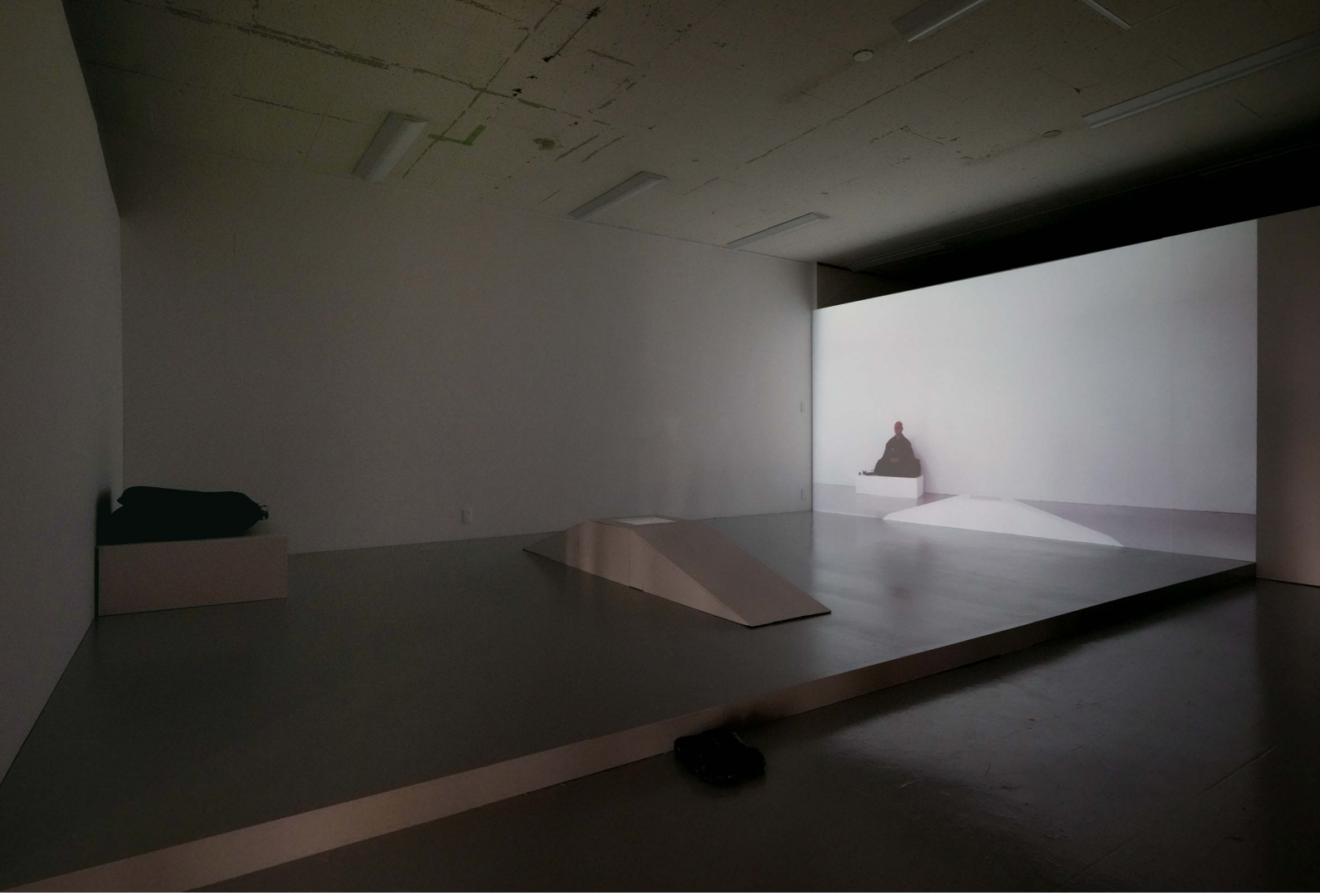
卒業制作優秀賞
北名古屋市長賞
名古屋芸術大学後援会賞
名古屋芸大展選出

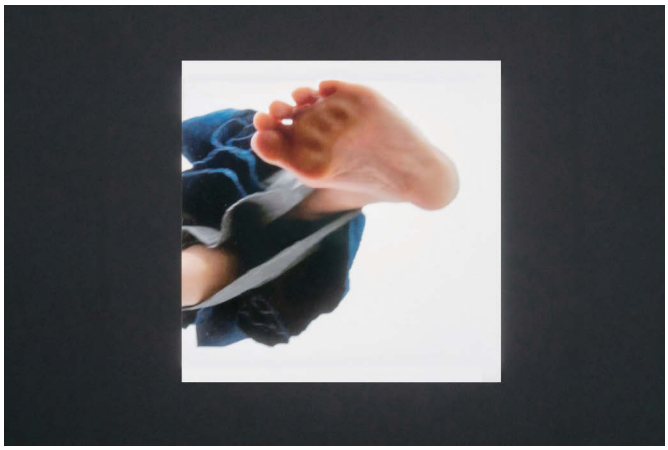


洋画コース
大嶽 涼太

日々を描いた小品とそれらを象徴するような大きな作品が組み合わされた連作的な作品。タイトルからもわかるように、1日ごとの心象を絵画にしたもので、時間的な連続性と経過も感じます。また、ユニークなのは文字がモチーフになっていること。言葉がそのまま絵になっています。「自分なりの方法で言葉を絵にしてみました。子どもの頃から、思っていることや心に浮かんだことを文字に書く癖があり、自分の癖を作品に生かしてみました」。

アルバイトでパワハラまがいの経験を受け悩むことになったこの1年。「自分は何をやればいいのかわからなくなり、大学4年の1年間は、あまり絵も描けず、ずっとネガティブな状態でした」。救ってくれたのは古くからの友人。「毎日すこしでもできることをやってみたら」と助言され、毎日を絵にしていったといいます。「先生や友達から、カルテみたいだねとか、アウトサイダーアートっぽいと言われました。展示では、自分の主観だけではわからない、いろいろなことに気付かされました。同じような悩みを抱えている人とコミュニケーションできたことも良かったです」。絵を描くことで自身を癒やすことにもなったといいます。





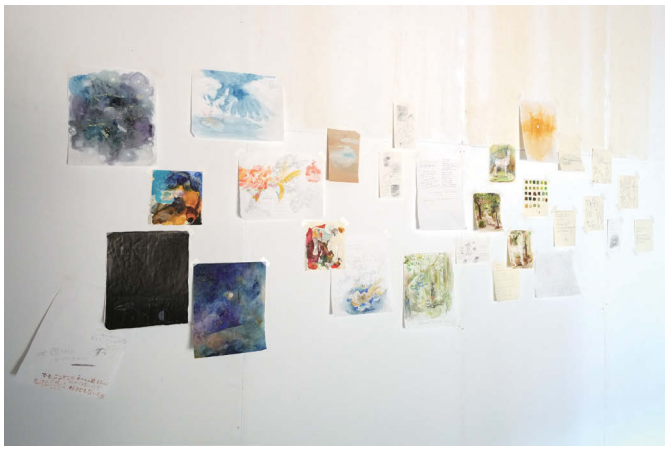
「反復の振る舞い」

卒業制作優秀賞
ブライトン大学賞佳作

メディアデザインコース
平山 亮太

一宮市妙興寺の境内にある塔頭寺院のひとつ来薫院のご住職に学校へ来ていただき、座禅を組む様子を撮影した映像作品。撮影した場所で動画を上映することで、現場のアーカイブとしての機能も果たしています。「僕は無意識に意図せず同じ場所を歩き回る癖があって、メディアコミュニケーションデザインコースの櫃田先生と話をしているときに、この反復行動の擦れに気付かされました。自分の行動に近いような動作をリサーチした際、『経行（きんひん）』といって座禅と座禅の合間に禅堂の周りの同じ場所をぐるぐると歩き回る動作があることを知りました。縁があって来薫院のご住職を紹介してもらい、制作に携っていただきました」。

靴を脱いで一段上がる作品スペースには落ち着いた雰囲気が漂い、座って映像を眺める人、映像と同じように歩いてみる人、スロープで遊ぶ小さな子と、さまざまに作品の世界に触れます。「自分の癖という私的な部分から始まり、ご住職とつながり作品になりましたが、やっぱり自分と作品はへその緒でつながっているような、そんな気持ちです。お客さんと話して気が付く発見もあり、教えられることがたくさんありました」。



「泰平を求む」

5RHall&Gallery賞
立風賞

アートクリエイター
（コミュニケーションアート）
コース
真野 佳那子

不思議な佇まいでこちら側を見据える「麒麟」。足下には小さな子どもの麒麟が寝そべるようにしています。麒麟は架空の存在ですが、立ち姿に生々しさがあります。観ていると静かな気持ちになると同時に、麒麟に見つめられていたたまれないような心のざわつきも感じます。「麒麟という生き物は、平和がないと生きていけない生き物です。世の中がどんどん暗い方向へ向かっていると感じ、麒麟の子どもは悪い影響を受けて亡くなってしまっています。今、私たちの世の中に平和って本当にあるのだろうかと問いかける作品です」。

真野さんが本格的に立体作品に取り組みだしたのは3年生になってから。「高校の頃から油絵をやってきましたが、フィギュアを作る授業を受け、素材や制作の専門的なことを聞いて、それ以来、楽しくて立体へ移行していきました。卒展では大きな作品を作りたいと考えていました」。

描くことも続けていて、平面と立体のどちらも続けて行きたいといいます。

「Space Party」

優秀賞

イラストレーションコース
大島 侑花

青色が印象的なイラスト作品。オリジナルの絵本をベースに、その一部をインスタレーション作品として仕上げています。「子ども向けのコンテンツを制作しました。物語は、二人暮らしをしていた相棒がいなくなり、探していくストーリーです。別れを経験しても心を閉ざしてしまうのではなく、生きている限り新しい出会いがあり、自立して外の世界を知って人生を謳歌して欲しいというメッセージを込めて作りました」。

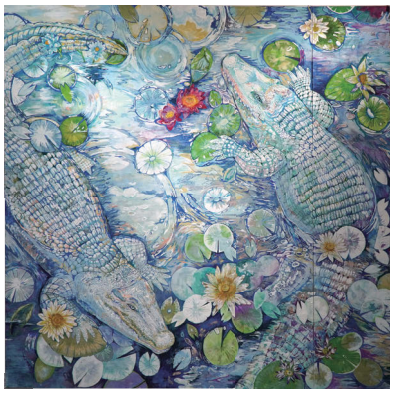
大島さんは、高校時代から始めたSNSで多くのフォロワーをもつ、いわばイラストのインフルエンサー。展示にもSNSで大島さんを知った人が見に来てくれたそうです。「主人公はこの作品のために考えたキャラクターですが、周りに出てくるキャラクターは高校時代から描いているオリジナルの子たちを入れ、自分としては集大成みたいな感じです」。

卒業後は高校の美術講師になることが決まったとのこと。先生と作家活動の両立をさせたいと抱負を話してくれました。

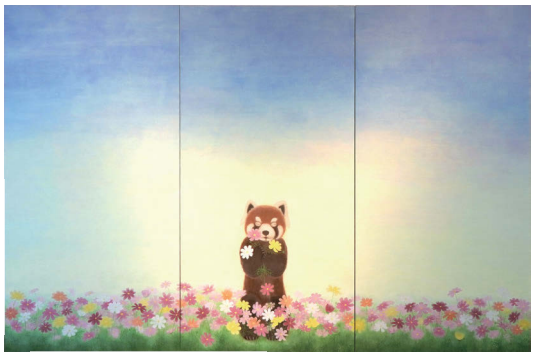
「どこでも恐竜展
～好奇心を育てる
子ども向けワークショップ～」
卒業制作最優秀賞
メディアデザインコース
東元 佐穂

「煉獄より～廻天のマッチポンプ～」
卒業制作優秀賞
ブライトン大学賞ノミネート
北名古屋市教育委員会賞
名古屋芸大展服部浩之特別賞
洋画コース
兼平 恵真

「Lumiére éternelle」
日本画コース
邨瀬 真旺
卒業制作優秀賞
ギャラリーかんしょ賞
後藤紙店賞
名古屋芸大展選出



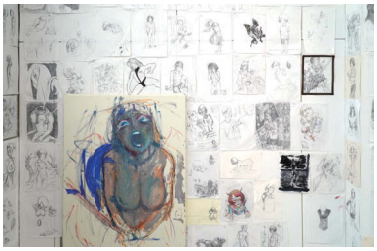
「棲み家」
日本画コース
加納 遥
卒業制作優秀賞
名古屋芸術大学美術・デザイン同窓会賞
後藤紙店賞
5RHall&Gallery賞
加藤画材店賞

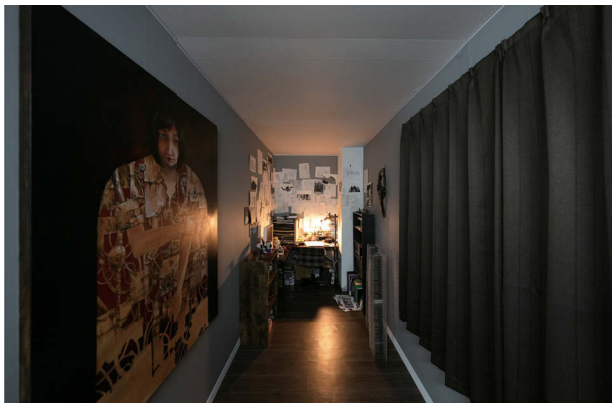


「こころ」
日本画コース
佐野 七海
卒業制作優秀賞
名古屋芸術大学後援会賞
ギャラリー MOS賞
名古屋芸大展選出

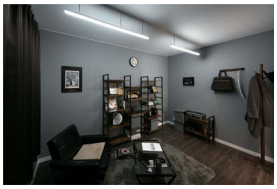
「緩み、紡ぎゆく」
卒業制作優秀賞
ブライトン大学賞ノミネート
画荘ヴィーナス賞
名古屋芸大展選出
洋画コース
清瀬 モモコ

「サヨナラだ!!」
卒業制作優秀賞
洋画コース
早川 龍之介





「all/oar」
卒業制作優秀賞
洋画コース
瀬古 亮河



「colloon」
卒業制作優秀賞
古川美術館賞
名古屋芸大展選出

アートクリエイターコース
（コミュニケーションアート）
佐藤 萌世

「よっこいしょ。」
卒業制作優秀賞
名古屋芸大展選出

アートクリエイターコース（陶芸・ガラス）
松岡 真矢

「百人百図」
卒業制作優秀賞
ブライトン大学賞ノミネート

ヴィジュアルデザインコース
小久保 楓

「魔法のない世界で
生きるということ」
卒業制作優秀賞

メディアデザインコース
石川 桃子

「ペチュニアの想う夢
-ジェンダー規範を
アップデートするBL-」
卒業制作優秀賞
画荘ヴィーナス賞
名古屋芸大展選出

イラストレーションコース
古川 慶悟

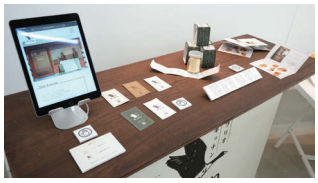
「金生山」
卒業制作優秀賞
名古屋芸術大学後援会賞
CBC テレビ賞
名古屋芸大展グランプリ

ヴィジュアルデザインコース
川瀬 詩乃

第49回名古屋芸術大学卒業・修了制作展を振り返って

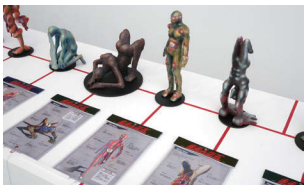
芸術学部長／デザイン領域 教授　萩原周

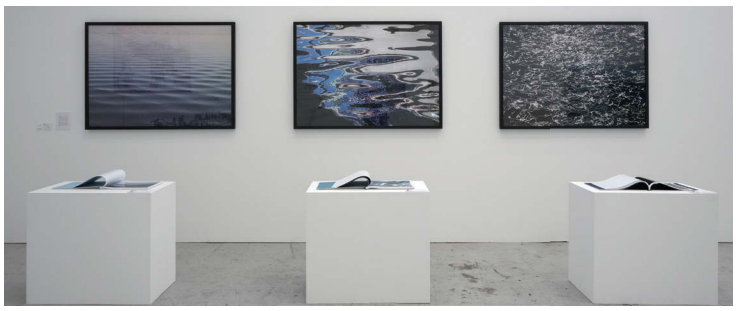
昨年に引き続きコロナ禍での卒業・修了制作展です。昨年、コロナによって社会や情報から少し距離を置き、個々がじっくりと自身の作品に向き合った結果、よく練られた作品になったということをお話ししました。条件としては今年も変わっておらず、やはりそうした作品が目に付いたように感じます。一方で、特別客員教授の手塚貴晴さんをお迎えしたスペースデザインコースの講評会では、「おまえら、壊れ方が足りない」と作品に対するエモーショナルな部分への指摘があったようです。作品に向き会い調和させて落とし込むという丁寧な作りの良さがある半面、冒険から離れ作品をきれいにまとめてしまった側面もあったのではないでしょうか。もっとわかりたい、もっと理解したいと、どんどん沼にはまり込んでいくような経験は、学生時代にぜひ体験して欲しいことのひとつです。作品として少々破綻しているようなところがあっても、教員側は評価



「ビブリオキッチン
かりがね」
卒業制作優秀賞
メディアデザインコース
加藤 詩野

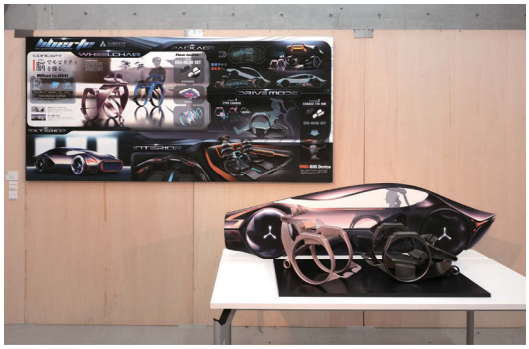
「未来人ラボ」
卒業制作優秀賞
ブライトン大学賞ノミネート
名古屋芸術大学後援会賞
共栄食品学生食堂賞
名古屋芸大展準グランプリ
メディアコミュニケーションデザインコース
島谷 研志





「surface」
卒業制作優秀賞
メディアコミュニケーションデザインコース
井上 真緒

「bloom」
卒業制作優秀賞
インダストリアル＆セラミックデザインコース
オキタ 成惇ジャスティン



「Liberte」
卒業制作優秀賞
ブライトン大学賞ノミネート
カーデザインコース
濱口 柊那

「ぽん
-ちょっと置きの
ためのスペース-」
卒業制作優秀賞
ブライトン大学賞ノミネート
スペースデザインコース
井手窪 祐衣

できるのではないかと思います。冒険的なレベルに至ってこそ面白いものが始まるのではないでしょうか。そういった意味では、アートクリエイターコースなどうまく学生に力を発揮させているように感じました。

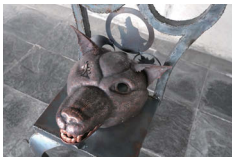
展示としては、キャンパスで展示するようになって今回で5回目ですが、キャンパスを使うという条件をかなり高いレベルで消化してきていると感じました。これまで規模や見せ方について展示の方法を模索してきましたが、とりわけデザインのU棟や美術のZ棟の展示は、はっきりとその答えを出してきたように感じます。特にU棟のイラストレーションコースの展示はかなり労力がかかったのではないかと想像しましたが、担当した先生によりますと、昨年から部材を用意していて、出来上がりから想像するよりも少ない労力でできたとのこと。会場作りまでを含めて自分の作品として取り組んでいることがよく伝わり、学内開催の意図が上手く消化されているのではないかと思います。

少々気が早いですが、来年度は第50回記念の開催となります。また、音楽領域ではこれまでコースごとに独立して開催されていた卒業・修了公演を統一タイトルを冠して展開することも計画されています。西キャンパスでは、芸術教養領域や文芸・ライティングコース、メディアデザインコースなどの文章表現、映像作品など閲覧するだけでも一定の時間を必要とする作品があり、そうしたコンテンツを観るための新たな枠組みも必要です。会場とは別のメディアで発信できる仕組みを作っていかなければと考えています。いずれにしても第50回の記念にふさわしいものになるよう考えていきたいです。

「コテン～移動式屋台での諏訪地域活性化～」

卒業制作優秀賞
ブライトン大学賞佳作

スペースデザインコース
中川 裕太



「人狼」

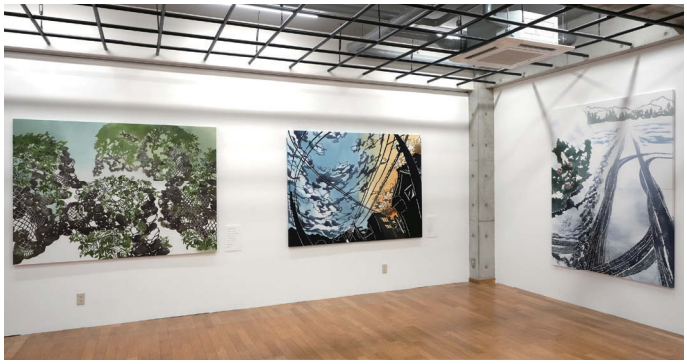
卒業制作優秀賞
ブライトン大学賞ノミネート

メタル＆ジュエリーデザインコース
岡島 真怜

「弔い」

卒業制作優秀賞
古川美術館賞

メタル＆ジュエリーデザインコース
田村 麻実



「終日パジャマ」

卒業制作優秀賞
ブライトン大学賞佳作

テキスタイルデザインコース
加藤 ひいろ

「つみかさね」

卒業制作優秀賞

テキスタイルデザインコース
坂本 萌

「かたとる -katatoru-」

卒業制作優秀賞
ブライトン大学賞ノミネート
共栄食品学生食堂賞
名古屋芸大展選出

ライフスタイルデザインコース
渡邊 愛奈

優秀賞・ブライトン大学賞授与式

2022年2月25日（金）、西キャンパスB棟大講義室にて、第49回名古屋芸術大学卒業制作展優秀賞、企業賞、ブライトン大学賞の発表と授与式を行いました。

Dear Prof. Makoto Hagihara, Dean of School of the Arts,

This is the third consecutive year that Jeremy Radvan and I have had the honour and great pleasure of judging your students' final exhibition work, and for the third consecutive year it has been a difficult task to select the prize winners from such a talented and hard-working group of students.

Yet again due to Covid-19 we are unable to be with you for your prize giving event. We have fond memories of our visit to NUA two years ago and the warm hospitality you extended to us. We felt we were truly amongst close colleagues.

Here below is our final selection of the awards, but before listing the winners, please could we express to all students that every single one of them should consider themselves a prize winner of an education that they will carry with them into their future careers and lives. A big congratulations to all students graduating this year!

Thank you also to Kumi Matsuzaki for organising easy access to the work.

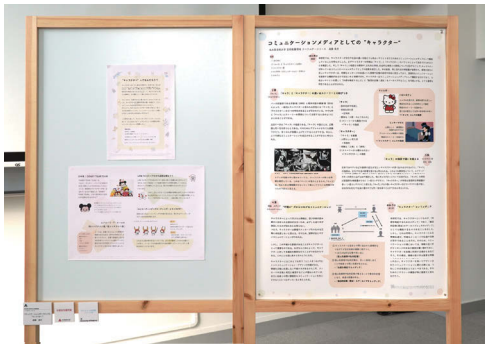
With very best wishes

Dr. Caterina Radvan

Principal Lecturer & Subject Group Leader
School of Art & Media
University of Brighton

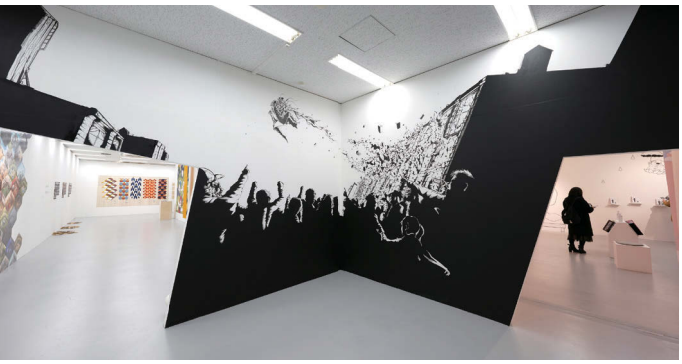
University of Brighton

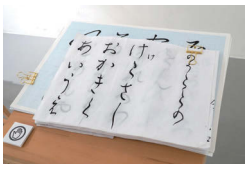
「物隙目」
卒業制作優秀賞
画荘ヴィーナス賞
文芸・ライティングコース
辻 鮎里



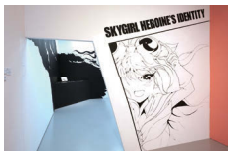
「コミュニケーションメディアとしての“キャラクター”」
卒業制作優秀賞
ブライトン大学賞ノミネート
リベラルアーツコース
遠藤 美月

「雪桜混降図」
大学院修了制作展優秀賞
美濃紙芸賞
5RHall&Gallery賞
大学院　美術研究科/美術専攻
絵画研究 日本画制作
三柳 有輝

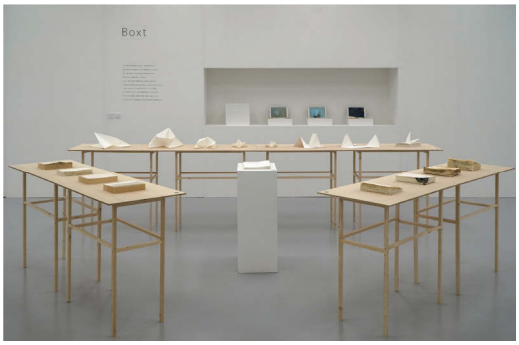




「月露体」
大学院修了制作展優秀賞
大学院　デザイン研究科/
デザイン専攻
ヴィジュアルデザイン研究
徐 揆



「SKYGIRL<HEROINE'S IDENTITY>」
ブライトン大学賞グランプリ
優秀賞
名古屋芸大展選出
イラストレーションコース
田中 嵩人



「Boxt」
ブライトン大学賞優秀賞
ヴィジュアルデザインコース
大熊 美央

芸術学部長、萩原周先生へ

ジェレミー・ラドヴァンと私は、3年連続で名古屋芸術大学の学生たちの卒業制作展の審査を担当する光栄と大きな喜びを味わっています。
そして今年も才能と努力にあふれた学生たちの中から受賞者を選ぶのは、大変な仕事でした。

今回もCovid-19のため、授賞式にご同席できませんが、私たちは、2年前に名古屋芸術大学を訪問したときに、皆様から温かいもてなしを受けたことをよく覚えています。その時、私たちは本当に親しい仲間に囲まれたような気がしました。

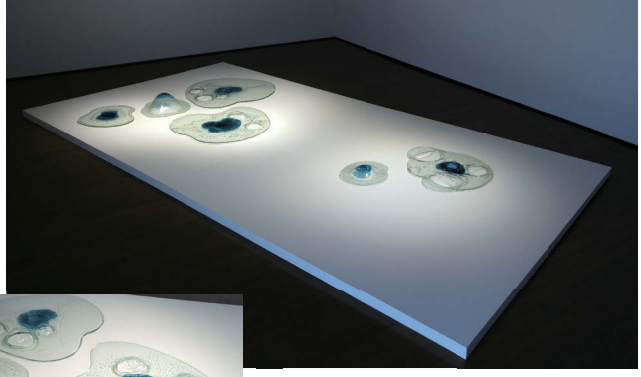
ここに最終的な受賞作品を掲載いたしますが、受賞者を掲載する前に、学生の皆さんへお願いがあります。皆さんは、将来のキャリアと人生につながる教育を名古屋芸術大学で受けた受賞者だと考えてください。今年卒業される皆さん、本当におめでとうございます。

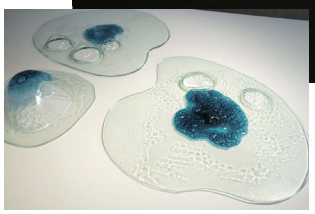
また、作品にアクセスしやすい環境を整えてくださった松崎久美先生、ありがとうございました。

カテリーナ・ラドバン博士

主任講師兼サブジェクトグループリーダー
アート＆メディア学部
ブライトン大学

「流れ星の降る夜は」
ブライトン大学賞奨励賞
アートクリエイターコース
（コミュニケーションアート）
村瀬 琴音





「泡沫の記し」
ブライトン大学賞奨励賞
アートクリエイターコース（陶芸・ガラス）
清水 菜月

「花暦皿」
ブライトン大学賞佳作
インダストリアル＆
セラミックデザインコース
渡邉 真菜

「2006」
ブライトン大学賞佳作
日本画コース
植田 百香

「伝染」
ブライトン大学賞佳作
メタル＆ジュエリーデザインコース
濵上 純華

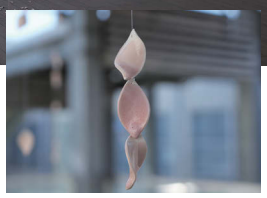
卒業記念講演
山田五郎氏「『好き』を作って食っていく」

評論家・編集者の山田五郎氏をお迎えし、「『好き』を作って食っていく」と題して卒業制作展記念講演を開催しました。

山田氏は、上智大学文学部在学中にオーストリア・ザルツブルク大学に1年間遊学し西洋美術史を学び、㈱講談社に入社、「Hot-Dog PRESS」編集長、総合編纂局担当部長などを経てフリーに。西洋史や愛好する機械式時計の著作やTVなどメディアへの出演でもお馴染みです。

講演は、「冷や酒と親父の説教は後で効く」と笑いから始まりました。前置きとして、コロナ禍の特殊な状況の中での卒業ということに触れ、「こうした経験は人類史上初めてのことであり、誰も経験したことのないことは必ず後の財産になる。こうした経験を誇りに思って胸を張って社会へ出ていって欲しい」と応援の言葉をいただきました。

冒頭から、言いたいことは「自分の好きな仕事で食っていこうじゃないか」ただこれだけとして、「寝ている時間以外の約半分を仕事に充てているのが社会人であり、それならば自分の好きなことを仕事にしたほうが正しい。好きなことを仕事にする、このことが青臭い理想論に聞こえるならば、それは社会が間違っている」と説明します。終身雇用と年功序列という会社のシステムを沈みゆく船に例え、現在の学生たちは沈没する船の帆柱にしがみついているように見えると指摘します。会社のシステムが崩



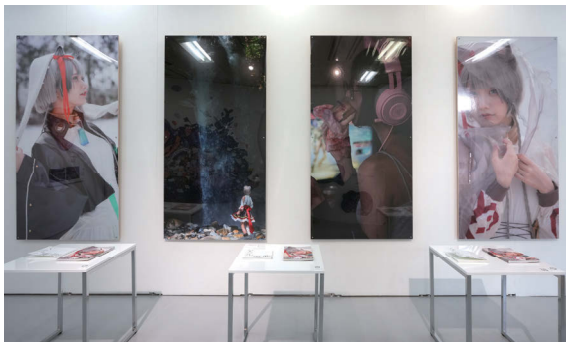
「最愛-不在の存在-」
ブライトン大学賞ノミネート
アートクリエイターコース
（コミュニケーションアート）
關山 瑞季

「服を着る理由は
あるのだろうか」
ブライトン大学賞ノミネート
領域賞
リベラルアーツコース
加藤 あん

「あなたと話せるVtuber」
ブライトン大学賞ノミネート
メディアデザインコース
上田 歩

「読書とメディア」
ブライトン大学賞ノミネート
メディアコミュニケーションデザインコース
市川 仁彩

「ふわふわ もくもく」
ブライトン大学賞ノミネート
テキスタイルデザインコース
杉田 結菜



「2.7次元生活」
ブライトン大学賞ノミネート
イラストレーションコース
松岡 かれん

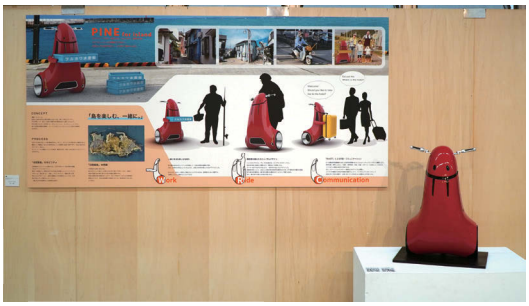
れようとしている今、そうしたものにとらわれず、自分のやりたいことを重視し、逞しく荒波に飛び込んで生きていって欲しいとエールを送りました。芸術と創作を学んだ学生こそ、人とは違うことを恐れずやり抜くことができる力があるはずであり、周りにながされる人を導くような存在になって欲しいといいます。

芸術を学ぶことについて、「才能と感性」に重きが置かれすぎているのではないかと問題を提起し、「創作において必ずしも絶対的なものではないのでは」と問いかけます。ゴッホを挙げ、絵を描いていた期間はほぼ5年、一般的に知られる絵は2年余りの期間に描かれたものといいます。また、ムンクも知られている作品群は19世紀の終わりのほぼ5年間に描かれたもので、その後の作品についてはあまり知られていないのだそうです。名だたる芸術家といえども、才能や感性だけで仕事をしているわけではないことを示し、才能や感性が創作のすべてではないことを説明します。芸術以外の分野でも、デビューすることよりも続けて行くことのほうが難しく、そのことに携わりながら“メシが食えている”かが、プロフェッショナルとしての条件ではないかといいます。そして、続けて行くことは、才能よりも努力を続けることが必要であると説明します。

日本の美術教育の問題として、才能や感性だけの問題と勘違いさせている部分があり、もっと知識を付けることや考えること、そのことを仕事としてやっていく方法について教えるべきではないかと問いかけます。美術や音楽の世界では、日本のマーケットだけを見ていても仕事としていくには難しく、ぜひ英語を習得して欲しいともいいます。語学は自転車や水泳と同じようなものだといい、必要があれば誰だってできるようになるもの。語学は道具と割り切って、コロナ禍が終わったあかつきにはぜひ海外へも目を向けて欲しいと説明しました。

また、グローバルに活動するためには日本文化の知識が重要であり、西洋の真似だけではなく日本人にしかできないことが求められ、それに応えられてこそ評価される現実があり、日本文化について詳しくなることが必須であると説きます。少しの英語力と西洋美術史、そしてたくさんの日本文化を身につけることが必要と説明しました。

さらに、好きなことを仕事にすることについて、多くの人が“好き”は能動的ではなく受動的なものと誤解しているところがあり、また、好みは変えられないものと思い込んでいるところがある。“好き”という情緒は不確かなもので、努力して作ることのできるものである、といいます。趣味であれ、仕事であれ、その中には必ず興味を惹かれる部分があり、そうしたことを感じながら努力していくことが肝要と説明しました。



「Pine for island」
ブライトン大学賞ノミネート
カーデザインコース
古川 達也

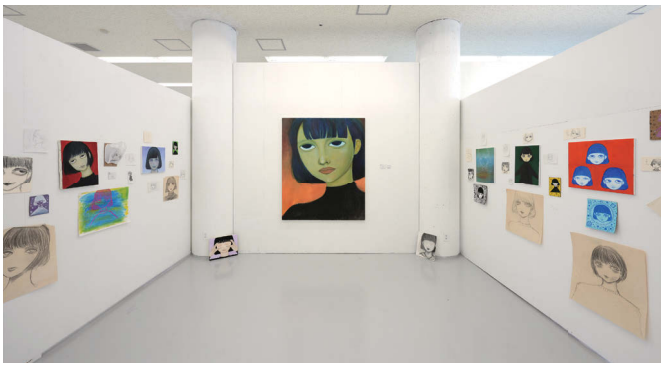
「ひらく雨具」
ブライトン大学賞ノミネート
インダストリアル＆セラミックデザインコース
SOH YUN PING

「ぐるぐる cosmos」
名古屋芸術大学美術・
デザイン同窓会賞
テキスタイルデザインコース
新木 萌愛

「壺葬せる」
ギャラリーかんしょ賞
日本画コース
大岩 弓未永

「記憶」
ギャラリーかんしょ賞
日本画コース
辻 南々子

「少女」
ギャラリーかんしょ賞
洋画コース
桑原 春海



卒業記念講演
デザイン領域 特別客員教授リレートーク
「これからのデザイン」

ビデオ参加
先端メディア表現コース　藤幡正樹氏（メディアアーティスト）
スペースデザインコース　手塚貴晴氏（建築家）
文芸・ライティングコース　谷山雅計氏（クリエイティブディレクター／コピーライター）

オンライン参加
メタル＆ジュエリーデザインコース　藤田政利氏（造形作家）
テキスタイルデザインコース　村瀬弘行氏（クリエイティブディレクター）
イラストレーションコース　榊原建佑氏（グラフィックデザイナー）
メディアコミュニケーションデザインコース　渋谷克彦氏（グラフィックデザイナー）
ライフスタイルデザインコース　林千晶氏（クリエイティブディレクター）

会場参加
ヴィジュアルデザインコース　原田祐馬氏（デザイナー／ディレクター）
【ファシリテーター】駒井貞治教授　デザイン領域主任／デザイン研究科長

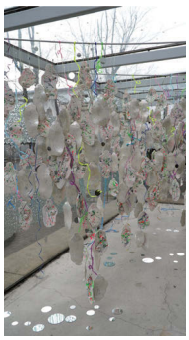
デザイン領域の特別客員教授をお招きし、「これからのデザイン～これからのデザイン実践、デザイン教育について」と題してリレートークを行いました。

前半の「これからのデザインがどこへ向かっていくのか」というテーマで、藤幡氏は「アートの本質はサイエンスや哲学と同じで探究心。本質に近付くためには、小さな気付きが重要」と語ります。手塚氏は「過去も将来もずっと同じで、自分にしかできないことをやる。それはどれだけ自分自身であるかということであり、それだけでオリジナリティの高いものとなる」といいます。谷山氏は、「クリエイティブの世界では、自分を信じる、自分が面白いものが一番、そういったアドバイスを受けるが、他人を面白がらせる、喜ばせるために全力を尽くしきり、そのうえで、最終的に自分にとって面白いものがいい、というのが大前提である」とアドバイスします。藤田氏はメタルの造形作家としての立場から「素材と対話しながら作品作りをしており、素材を選ぶことや素材に慣れ親しむことから気付きがあり、本質につながる」と話し、村瀬氏は「20代の人と仕事をすると、その若い感覚がすごく大切で、新たに気付くことが多い。自分自身の中にある価値に気が付いて欲しい」と話します。榊原氏は「手塚氏のオリジナリティの話は、背景に膨大な知識と学びがあり、過去にどんなものがあったかを知らなければ、自分の価値や今いる場所すらわからない。過去

「浮遊」
美濃紙芸賞
立風賞
日本画コース
青木 莉華

「迷える羊」
森荘賞
日本画コース
中根 彩花

「知覚する主体」
5RHall&Gallery賞
洋画コース
宮向井 奈桜



「Strata erosion /
My secret thoughts」
アートクリエイターコース助手賞
立風賞
アートクリエイターコース
（陶芸・ガラス）
吉田 百花

「裏の裏と裏に愛」
特別客員教授 栗木義夫賞
アートクリエイターコース助手賞
名古屋芸大展選出
アートクリエイターコース
（コミュニケーションアート）
小林 萌子

「○△□-カタチから再見する-」
手塚賞
名古屋芸大展選出
スペースデザインコース
清水 紗良

を学ぶことでオリジナリティのあるものを作ることができるのでは」と問いかけます。渋谷氏は「2つの視点が必要で、ひとつは自分の価値をどういうふうに形にしていくか、もうひとつは社会的な見方をすること。時間が経てば社会的に良いこと、悪いこと、正義ですら変わってしまう。この2つを意識しながらアジャストしていくような感覚がデザインには必要」といいます。林氏は「これまでに誰も経験したことのないことばかり。これまでの成功体験はまったく役に立ちません。20代の人は、批判を気にせずおかしいと思うことをどんどんいっていけばいいと思う。新しい視点をぜひ見せて欲しい」と話します。原田氏は「右肩下がりの時代は、いろいろなことに携わることが求められる時代。人が通って仕事をすることが前提の都市の構造すら変わる。こんな時代だからこそチャレンジできるし、デザインを学ぶことは環境の変化に対応できることだと思う」と述べました。

後半は、教育機関として多様な視点や考え方、価値観を、どうやって若い人に伝えていくかという話題です。藤田氏「名古屋芸大の工芸分野連携の取り組みは、多様性という点で非常に意義深く思う。領域の横断は、新しい価値に気付くことで、とても重要」。村瀬氏「ドイツの大学では教える先生もカリキュラムも明確になっておらず、何をやろうか自分で決めるシステムで、主体性が育まれた。自分で決め一歩踏み出す能力はとても重要」。榊原氏「自分がどんなものに反応するか見付け出すことが大事。学生の興味を引き出すのが大学の仕事。デジタル化が進み、一見デザインされたように見えるものが簡単にできる。そうした状況の中、どう差を作るか、どう考えるかが大事。素材に触れることも重要」。渋谷氏「コロナ禍で若い世代にも今できることに感謝する気持ちが広まり、いろいろなものを丁寧に扱うようになったと感じる。過去のすべてのデザインは未来への希望を形にしたものであり、デザインはいつも希望である。過去を丁寧に拾い集めて新しいものができないかと思っている」。林氏「減点法ではなく、加点法で考える。生きていく中で何ができるか、できることを伸ばすように考える。先生は立場として学生のパートナー。横にいるもので前に立つ存在ではない。後方支援する役割だと思う」。原田氏「先生の役割は、その専門分野の未来や将来について、その領域が今後どうなるかを学生に見せることではないかと思う。基礎教育を見直すようなことを学生と一緒に考えていくのも良いと思う」。

それぞれの言葉からは、時代の変化に対応するために基本に戻り、原点を見つめることの重要性を強く感じました。また、大学の役割として、「可能性の発見と個人を後方から支援するような支え方、個人それぞれの主体性を育むことが求められている」と結論付けられました。

愛知県芸術文化選奨 文化新人賞を川田健太郎講師、水野里奈氏が受賞

令和3年度 愛知県芸術文化選奨 文化新人賞を本学 音楽領域 鍵盤楽器コース 川田健太郎講師と、本学洋画コースOGで昨年度まで洋画コース 非常勤講師を務めた水野里奈氏が受賞しました。愛知県芸術文化選奨は、芸術文化の各分野においてその向上発展に貢献し、業績が顕著な個人・団体に贈られるもので、昨年度はコミュニケーションアートコース 荒木由香里 非常勤講師が、同じく新人賞を受賞しています。

受賞したお二人にお話を伺いました。

川田健太郎

■音楽領域
鍵盤楽器コース（ピアノ）
講師

おめでとうございます。

ありがとうございます。一緒に受賞させて頂いた方達には、能楽師や舞踊家、画家、書道家などさまざまな芸術分野の方々がいらして、そうした方たちと共に受賞させて頂けたことも、とても光栄に思っています。授賞式で受賞理由をご説明頂いたのですが、ジャンルの枠にとらわれないこれまでの活動が評価されたとの事でした。私の専門はクラシック音楽で、自分としても勿論クラシックの比重が大きく、プライドを持って活動してきました。その軸を深めていく上で、さまざまなジャンルの方々ともかかわりながらクラシックという分野を広げていき、クラシック音楽の聴衆が育っていく一助となる活動に繋げられたらなと常日頃思っています。自分の方針として、ジャンルにとらわれない活動というのは以前から心掛けてきたことなので、そうしたところを評価して下さったことはとても嬉しく思います。

今後についてはいかがですが？

コロナ禍の世の中で、いつ感染するか、いつ濃厚接触者になるか不安を抱えながら準備をしなければいけない。全ての演奏家の方々もそうした難しい中でモチベーションを保ち活動していると思いますが、徐々にコロナと社会の付き合い方が見えてきたのかなと感じます。音楽業界もオンライン配信とのハイブリッド方式での開催など、いろいろな試行錯誤を続けてきました。名芸でも、大学主催公演でサウンドメディア・コンポジションコースによる配信がコロナ流行と共に直ぐに始まりましたが、先生方の対応もスピーディーでクオリティーも非常に高い。学生たちも非常にいきいきと取り組んでいるのを見て、名芸の強みだなと感じています。こうした難しい状況となってもフレキシブルに対応出来る名芸に、我々も演奏系コースの学生も非常に勇気づけられましたね。音楽の聴衆への届け方も様々な形で大きく変化していくかと思います。

水野里奈

■美術学部 洋画2コース卒業
■2021年まで美術領域
洋画コース非常勤講師

おめでとうございます。

ありがとうございます。自分でもうれしいですし、何より家族が喜んでくれたことが良かったです。創作活動はひとりではできないことなので、支えてくれた夫や両親への恩返しにもなったのではないかと思います。心配させてきたというか、この道でやっていきたいと突き進んできたので、受賞という目に見える形になったことは良かったなと思います。

ご自身の作品について教えて下さい

一枚の絵にいろんなものを含みたいと思っています。大きく3つありまして、油絵なんですが、水墨画のような墨のタッチのように見える日本的な要素。それから、中東に細密画（ミニアチュール）という絵がありますが、すごく細かくて油絵具の表現とかけ離れています。それを油絵で表現したい。もう一つ、水墨画のような勢いのある表現と細密画のような細かな表現を使った強い画面を作ると、描きすぎてしまう懸念があり、描ききるのではなく、キャンバスの生地の感じを残すように心がけています。そのため、キャンバスの素材にこだわり、通常は下地に白い塗料が塗られていますが、生地のままの特殊なものを取り寄せて使っています。日本と中東、素材はヨーロッパと、いろいろな国のエッセンスを組み合わせて、インパクトの強い作品ができたらいいなと思って創作しています。

「森の中の泉」
2021年181.8×227.3cmキャンバスに油彩、ボールペン
©MIZUNO Rina
Courtesy Mizuma Art Gallery

＞インタビュー詳細は、名古屋芸大グループ通信ウェブサイトでご覧いただけます

表紙の作品
「少女」 ギャラリーかんしょ賞
洋画コース 桑原 春海

「名古屋芸大グループ通信」ウェブサイト

発　　行：名古屋芸術大学
企画・編集：広報部
デザイン・協力：くまな工房一社
印　　刷：㈱クイックス
発　行　日：2022年5月16日

【お問い合わせ先】
名古屋芸術大学　広報部
〒481-8503
愛知県北名古屋市熊之庄古井281番地
電話　0568-24-0318
FAX　0568-24-0369
E-mail：grouptu-shin@nua.ac.jp

Japan Institution for Higher Education Evaluation
JIHEE since 2004
UNIVERSITY 2017

※記事中のホームページアドレスは、掲載先の諸事情で移転や閉鎖されている場合がございます。あらかじめご了承ください。